

寺福童遺跡 6

—福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第294集

2015

小郡市教育委員会

序

小郡市では、これまで北部の大規模宅地造成や中部の工業団地整備に伴い、数々の埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。その大半は開発によって消滅してしまいましたが、発掘調査によって残された記録や出土したさまざまなモノから、この街が経てきた歴史の姿が明らかにされています。

近年は、市街地の宅地造成や住宅建設に伴う小規模な発掘調査が増加しています。これらはメディアを賑わすような派手さはありませんが、ひとつひとつの調査の情報を積み重ね、剥ぎ合わせることで、大規模な発掘調査と同様の「歴史の姿」が露わになります。市域や地域の歴史を復元するための重要なパーツとなりえるのです。このような大小を問わない情報の蓄積が、やがて郷土の歴史をより深く、厚みを持ったものにしていきます。

ここに報告いたします寺福童遺跡は、これまで5次にわたる発掘調査が行われ、平成16年に確認された銅戈埋納遺構や甕棺墓群などにより、弥生時代の有力な勢力が存在したことが判明しています。今回の発掘調査では、古墳時代前期の遺構が見つかり、平成12年に発掘調査を行った隣接地との関係を明らかにすることができました。

最後になりましたが、今回の調査において工事関係者と地元寺福童区のみなさまには多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

平成27年3月31日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は小郡市寺福童に所在する埋蔵文化財包蔵地・寺福童遺跡地内で計画された、宅地造成に先立って実施した発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に掲載した遺構図面は調査担当者が作成した。
3. 発掘現場での個別遺構写真は調査担当者が撮影し、遺跡全景写真の撮影については有限会社空中写真企画に委託した。
4. 巻末写真図版の遺物写真の撮影は有限会社システム・レコに委託した。
5. 出土遺物の洗浄・復元には衛藤知嘉子・佐々木智子の協力を得た。遺物実測は調査担当者が、遺構図面及び遺物実測図の製図は久住愛子が行った。
6. 本調査に関わる出土遺物・写真・カールスライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。
溝状遺構：SD 土坑：SK 不明遺構：SX

本文目次

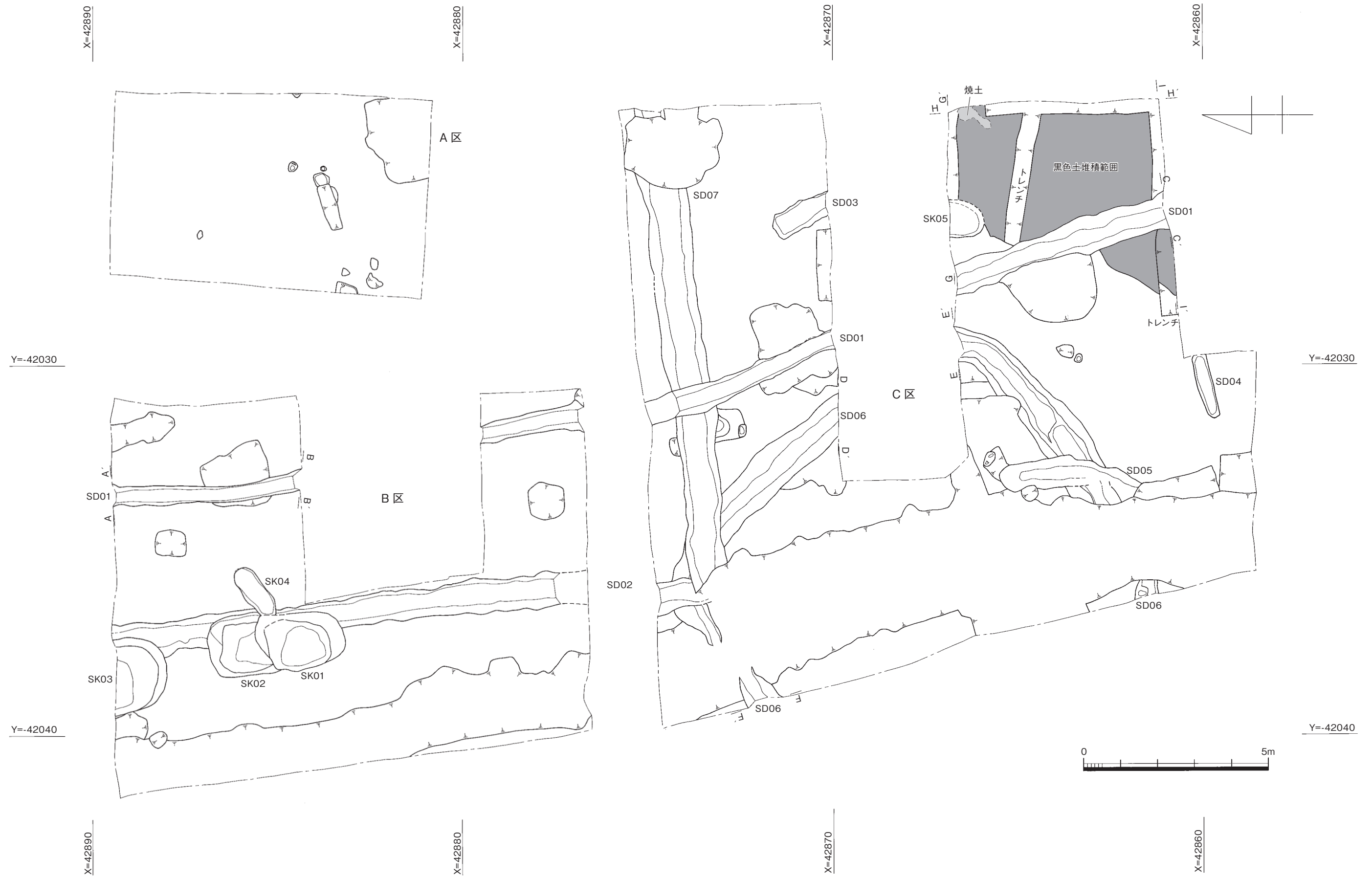
I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. 寺福童遺跡6の遺構と遺物	4
IV. 調査成果のまとめ	16

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図(S=1/50,000)	3
第2図 調査地位置図(S=1/5,000)	3
第3図 寺福童遺跡6 遺構配置図(S=1/100)	5・6
第4図 1・2号土坑 平・断面図(S=1/40)	7
第5図 3・4・5号土坑 平・断面図(S=1/40)	8
第6図 溝状遺構 土層断面図(S=1/40)	10
第7図 土坑・溝状遺構・攪乱 出土遺物(S=1/4)	11
第8図 6号溝状遺構 平・断面図(S=1/80,30)	12
第9図 6号溝状遺構 出土遺物(S=1/4)	13
第10図 C区南東部壁面 土層断面図(S=1/40)	15
第11図 周辺調査区と今回調査地点(S=1/2,000)	16

図版目次

図版1 ①寺福童遺跡6 A・B区全景(直上から、写真 上方が北)	④7号溝状遺構 完掘状況(西から)
②寺福童遺跡6 C区全景(北から)	⑤C区北壁黒色土堆積 土層断面(南西から)
図版2 ①1号土坑 土層断面(西から)	⑥C区東壁黒色土堆積 土層断面(北西から)
②1号土坑 完掘状況(東から)	⑦C区南壁黒色土堆積 土層断面(北東から)
③2号土坑 土層断面(北から)	図版4 ①6号溝状遺構 完掘状況(真上から)
④2号土坑 完掘状況(東から)	②6号溝状遺構 土層断面(南西から)
⑤3号土坑 土層断面(南から)	③6号溝状遺構 土層断面(東から)
⑥3号土坑 完掘状況(西から)	④6号溝状遺構 土層断面(北西から)
⑦4号土坑 完掘状況(南東から)	⑤6号溝状遺構 遺物出土状況(1)(西から)
⑧1号溝状遺構 土層断面(B区北壁)(南から)	⑥6号溝状遺構 遺物出土状況(2)(南西から)
図版3 ①1号溝状遺構 土層断面(B区南壁)(北から)	⑦6号溝状遺構 遺物出土状況(3)(南東から)
②1号溝状遺構 B区完掘状況(北から)	図版5 出土遺物(1)
③2号溝状遺構 完掘状況(北から)	図版6 出土遺物(2)



第3図 寺福童遺跡6 遺構配置図 (S=1/100)

I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

小郡市寺福童は、昭和2（1927）年九州帝国大学の医学部教授であった中山平次郎博士により「寺福童出土の甕棺」が紹介されたことで学史上著名となった地域である。これまで6次にわたる発掘調査（寺福童内畑下道東遺跡を含む）を実施しており、弥生時代から古墳時代前期にかけての墓域と、古墳時代後期の集落、近世の集落を含む複合遺跡であることが明らかとなっている。

本遺跡の調査は、建売住宅建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」（事前審査番号3074）が提出されたことに始まる。これを受けて試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、切土造成工事箇所及び住宅建設箇所については発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、地権者・施工業者双方と小郡市教育委員会で協議し、平成25年度事業として発掘調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

(2) 調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

＜小郡市教育委員会＞

教育長 清武 輝

部長 佐藤秀行

文化財課長 片岡宏二

係長 柏原孝俊

技師 上田 恵

＜調査参加者＞ 石井京子 井村義彦 佐藤照子（以上小郡市在住、五十音順）

(3) 調査の経過

発掘調査は平成26年1月27日から3月28日にかけて実施した。調査対象箇所が敷地内に点在する状況であったため、作業の都合上調査区を3分割してそれぞれA～C区と命名している。調査区はいずれもG.L.40～70cmまでの近年の耕作土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行なった。

以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

- 平成26年1月27～28日 A・B区表土の重機掘削、機材搬入
- 29日 測量作業実施、人力による遺構検出・掘削開始、以後随時写真撮影・遺構図化による記録作業を並行して実施
- 2月11日 A・B区の全ての遺構掘削終了
- 13日 バルーンを使用したA・B区全景写真撮影
- 17～21日 重機によるA・B区表土埋め戻し、C区表土掘削
- 22日 測量作業実施、人力による遺構検出・掘削開始、以後随時写真撮影・遺構図化による記録作業を並行して実施
- 3月23日 C区の全ての遺構掘削終了
- 25日 バルーンを使用したC区全景写真撮影
- 26～28日 重機によるC区表土埋め戻し、現地立会の上引き渡し

以後、図面・出土遺物の整理作業を実施。なお、引き渡し後開発工事が実施され、現在遺跡は消滅している。

Ⅱ. 位置と環境

(1) 地理的環境

小郡市域は南北に長く、筑後川の支流である宝満川によって東西に二分される。東岸は朝倉郡筑前町との境界である城山（花立山）を頂点として南へと低台地が延び、宝満川に由来する沖積地を経て筑後平野へ至る。西岸には脊振山系から派生する丘陵（通称・三国丘陵）があり、やはり南へ行くに従って緩やかに下って台地へ移行する。さらに南下すると東岸と同様に沖積地から平野部へ地形の変化を見せる。寺福童遺跡は小郡市中央部、宝満川西岸の台地部分が舌状に張り出す低位段丘の、南東裾部分に位置している。

(2) 歴史的環境

「寺福童」という地域は、九州考古学の祖と呼ばれる中山平次郎氏に紹介された弥生時代の甕棺によって、考古学の世界に名を記した。この甕棺は昭和14（1939）年に弥生土器の全国的な編年資料として「弥生式土器聚成図録」に掲載され、北部九州における弥生時代後期の甕棺の代表例として広く研究者に知られることとなった。しかし遺跡の実態については長らく不明のままであり、平成9（1997）年以降この地域で本格的な発掘調査が実施されるようになって、ようやくその様相が解明され始めた。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に、歴史的環境の概要を示す。

小郡市における人類の活動は旧石器・縄文時代に始まるが、確認されている遺構・遺物は花立山山麓や三国丘陵上の表採資料や大崎井牟田遺跡（11）の集石遺構、干潟向畔ヶ浦遺跡（2）の落とし穴状遺構など限定されたものである。寺福童周辺では福童町遺跡6（17）で鐘崎式土器の小片が混入品として出土している。

弥生時代前期になると、三国丘陵の南端にあたる力武内畑遺跡（5）から水田耕作を伴う本格的な集落経営が始まり、以後この周辺で横隈山遺跡（4）や津古内畑遺跡（1）、一ノ口遺跡（3）など活発な展開が見られるようになる。市域中部では前期末から小郡遺跡（7）・大板井遺跡（8）・小郡若山遺跡（6）にまたがる大規模な集落が成立する。この集落には大型円型住居跡や多数の祭祀遺構、独立した墓域が構築され、大板井遺跡の銅戈や小郡若山遺跡の多鈕細文鏡といった祭器を有していることなどから、この地域の拠点集落と想定されている。また寺福童遺跡4（15）では銅戈9本を埋設した土坑が、寺福童遺跡5（12）では柳葉式磨製石鎌を伴う前期の木棺墓から中期を主体とする甕棺墓へと連続する墓域が確認されている。このほかにも、本格的な発掘調査は行われていないが、寺福童と小郡を南北に結ぶ県道小郡久留米線（現・市道中町寺福童208号線）工事の際に、弥生時代中期を主体とする甕棺が確認されている。但しこれらの墓域を形成した集団の集落は未確認であり、今後の周辺地域の調査に期待される。

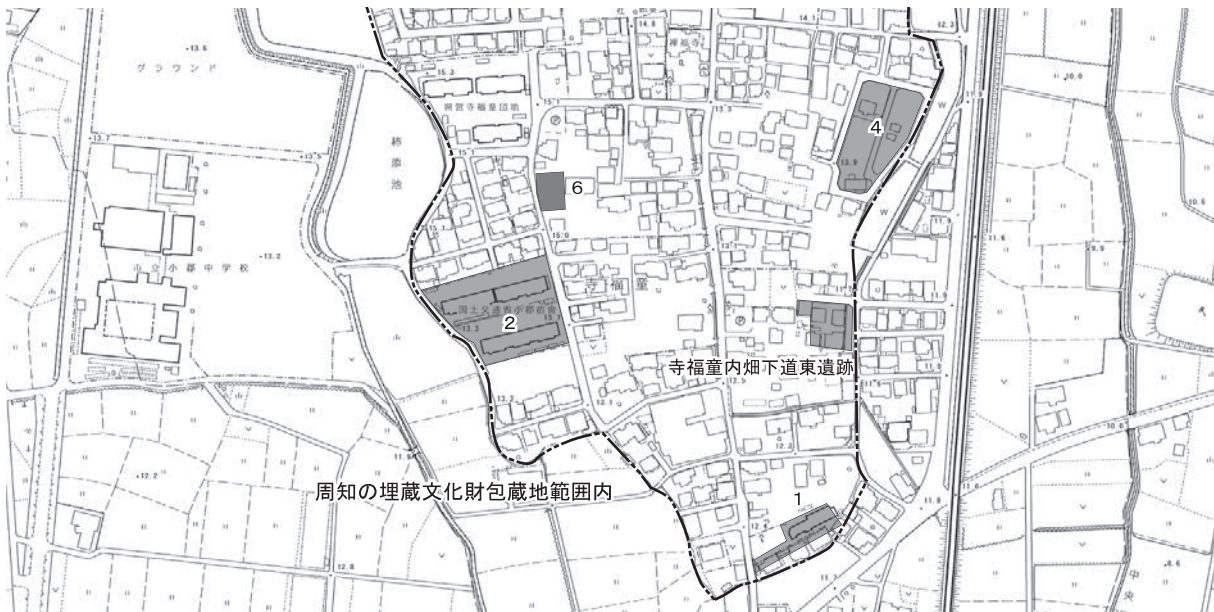
古墳時代初頭には、大崎小園遺跡（16）や福童町遺跡1（22）で集落が成立する。この時期の墓域には方形周溝墓4基を有する寺福童遺跡1（19）があり、両者の関連が想定される。中期の様相は遺構・遺物が疎であることから不明な点が多いが、後期から末期にかけては寺福童遺跡4の堅穴住居群や、寺福童内畑下道東遺跡（21）の掘立柱建物、刀子・耳環を伴う土壙墓が見られる。

律令期の小郡市は「筑後国御原郡」と称され、御原郡衙に比定される上岩田遺跡（9）・小郡官衙遺跡（7）の配下に置かれる。寺福童遺跡3（14）ではこの時期の堅穴住居跡と掘立柱建物が、福童町遺跡2（18）では区画用と考えられる溝状遺構が検出されている。

中・近世の遺構・遺物は近年の調査による確認例が多い。福童山の上遺跡（10）で掘立柱建物と溝状遺構、道路状遺構、土坑、井戸が検出され、龍泉系青磁や白磁等が出土している。近世の遺構としては寺福童遺跡2（20）で集落域の区画と思われる溝が検出されているほか、福童東内畑遺跡（23）では近世の所産である井戸・土坑群・溝状遺構群が検出されており、まとまった量の陶磁器が出土している。このように、小郡市域では連綿と人びとの生活が営まれていた。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 調査地位置図 (S=1/5,000)

Ⅲ. 寺福童遺跡6の遺構と遺物

調査区は、既調査地である寺福童遺跡2の北東に近接する、約360㎡の区画である。西側は市道に面しており、道路より1m前後傾斜した高台状の地形であった。地元住民によると、この市道はかつて建設省（現・国土交通省）の専用道路として周辺を削平して設置されたそうで、今回調査した遺跡はこの道路部分まで延長していた可能性が高い。

遺構の掘り込み面は褐色ローム～黄褐色粘質土層（基盤層）で、標高14.7～15.2m前後を測る。検出面は現況地形と同じく、東半部は平坦で西側に向かって傾斜する形状を取る。調査区は3区に分割し、2度に分けて表土剥ぎ及び掘削作業を実施した。A区では少数のピットを検出するにとどまり、B・C区が調査の主体となっている。調査区西端には道路建設時に設置されたと思われる大規模な側溝の痕跡が認められた。また、調査区内で大型かつ深い攪乱土坑を複数確認している。

検出遺構は、土坑3基、溝状遺構7条とピット群で、多くは近世の所産であった。通常の集落遺跡と比較すると、ピット群の検出数が非常に少なく、集落域の境界に近い箇所もしくは生産域であったと推定される。溝状遺構のうち、6号溝状遺構は方形周溝墓と考えられるが、道路側溝により主体部が確認できなかったため、方形周溝状遺構として取り扱っている。遺構密度は比較的低く、表層土や攪乱埋土に含まれる遺物も少量であった。遺構からの出土遺物も少なく、まとまった遺物が出土しているのは6号溝状遺構のみである。

【土坑】

1号土坑（第4図、図版2）

B区中央北寄りに位置し、2・4号土坑、2号溝状遺構を切る。主軸は南北方向で、平面プランは不整楕円形を呈する。長さ2.35m、幅1.55m、深さ最大0.75mを測る。西側を除く3辺は2段掘り込みの形状をとり、底面は南へゆるやかに傾斜する。埋土はしまりの悪い黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。近世の廃棄土坑と考えられる。

混入品と見られる弥生時代後期の土器片のほか、土師器小皿の小片が出土している。

2号土坑（第4図、図版2）

B区中央北寄りに位置し、1・4号土坑に切られ、2号溝状遺構を切る。南北方向に主軸をとり、平面プランは隅丸長方形を呈する。残存長1.9m、幅1.7m、深さ最大0.75mを測り、西半部は2段掘り込み、東半部は幅0.2mのテラスを持つ。底面は中央に向かってゆるやかに傾斜し、擂鉢状の形状をとる。埋土は灰黄褐色～黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。近世の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第7図、図版5）

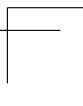
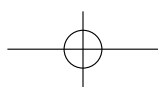
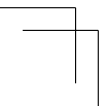
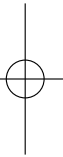
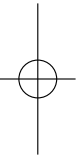
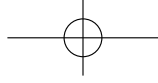
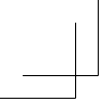
1は土師器の土鍋。口縁端部に断面台形の粘土帯を貼り付けるタイプのもの。内面はヨコハケ、外面はナデで調整しており、外面には厚く煤が付着している。このほか、粘土塊や土師器小皿の小片が出土している。

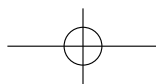
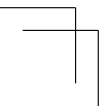
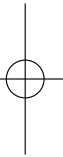
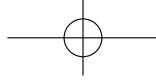
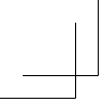
3号土坑（第5図、図版2）

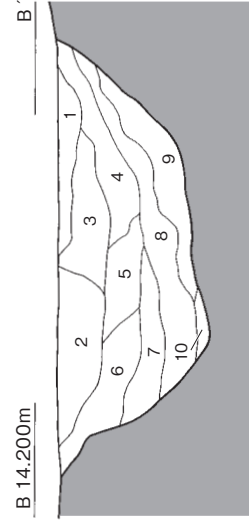
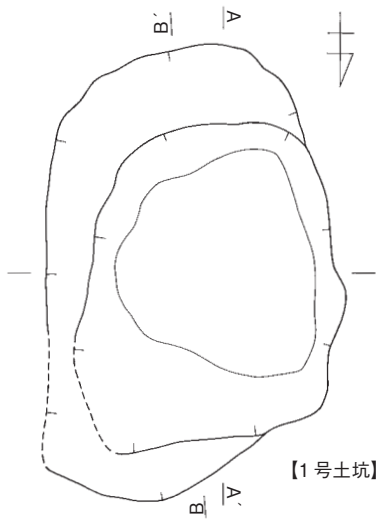
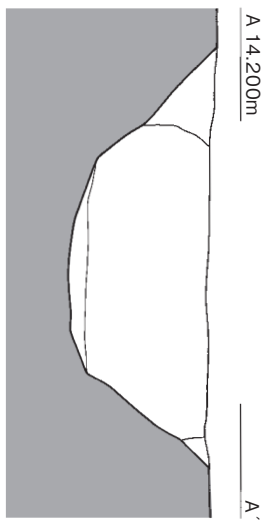
B区北西部に位置する。北半部は調査区外へ延長し、2号溝状遺構を切る。主軸は南北方向、平面プランは楕円形と考えられる。南北検出長1.5m、東西幅2.1m、深さ最大0.8mを測る。2段掘り込みの形状をとり、底面は中央へ向かって擂鉢状に極ゆるやかに傾斜する。埋土は黒褐色～暗褐色シルトを主体とし、水平堆積の様相を示す。近世の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第7図、図版5）

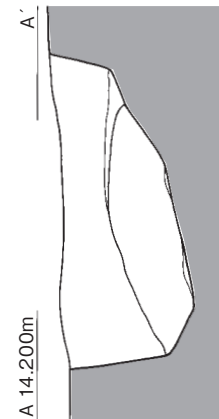
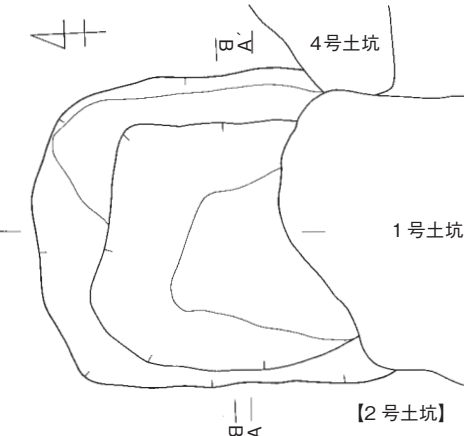
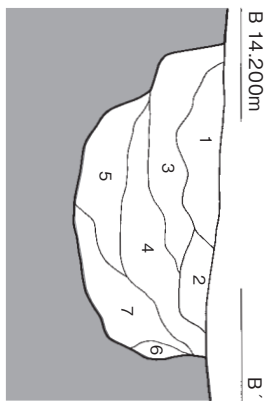
2・3は土師器土鍋の口縁部。端部に断面三角形の粘土帯を貼り付けるタイプのもの。いずれも内面はヨコハケ、外面はナデ調整。外面に指オサエの痕跡が目立つ。このほか、粘土塊や土師器小皿が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。







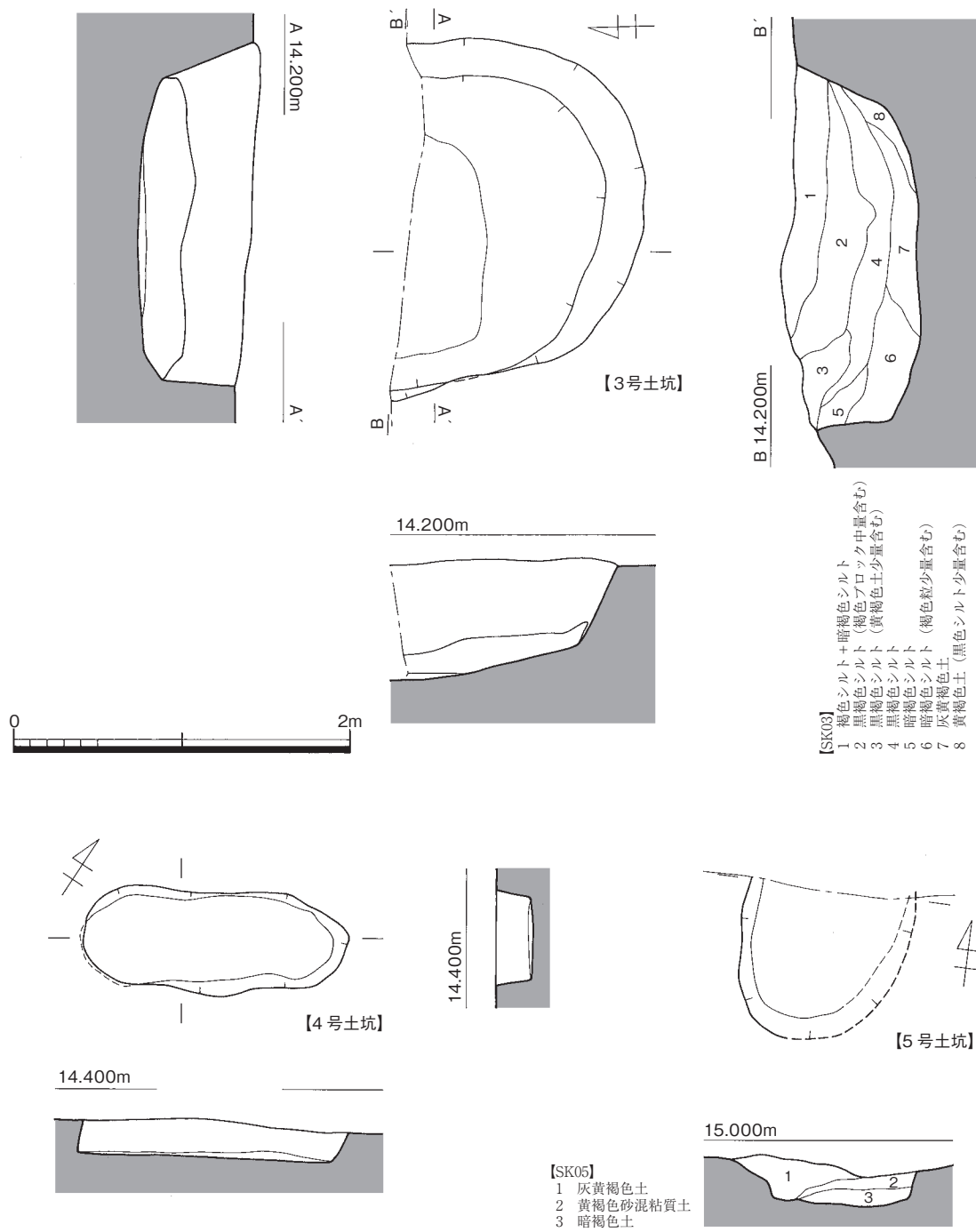
- 【SK01】
- 1 黒色シルト (黒灰色ブロック少量含む)
 - 2 黒褐色シルト (黒灰色・黄褐色ブロック少量含む)
 - 3 黒褐色土 (褐色・黄褐色ブロック微量を含む)
 - 4 黒褐色土 (褐色ブロック中量含む)
 - 5 黒褐色土+褐色ブロック+黄褐色ブロック
 - 6 褐色シルトブロック
 - 7 灰黄褐色土 (褐色ブロック少量含む)
 - 8 褐色土 (灰黄褐色土微量を含む)
 - 9 黒褐色土 (黄褐色土極微量を含む)
 - 10 黄褐色粘質土 (灰黄褐色土少量含む)
- *全体にしまり悪い。



- 【SK02】
- 1 黄褐色ブロック+褐色ブロック+暗褐色シルト
 - 2 灰黄褐色土 (褐色ブロック少量含む)
 - 3 褐色土 (黄褐色粒微量を含む)
 - 4 暗褐色土 (褐色ブロック少量含む)
 - 5 黄褐色砂混粘質土 (灰色砂質土少量含む)
 - 6 黒褐色シルト
 - 7 灰黄褐色土 (黄褐色粒少量含む)



第4図 1・2号土坑 平・断面図 (S=1/40)



第5図 3・4・5号土坑 平・断面図 (S=1/40)

4号土坑 (第5図、図版2)

B区中央北寄りに位置し、1号土坑に切られ、2号土坑を切る。北東—南西方向に主軸をとり、平面プランは楕円形を呈する。長さ1.55m、幅0.6m、深さ0.2mを測り、壁面は直立して立ち上がる。埋土は水平堆積の様相を示すが、2層しか残存していない。

出土遺物は皆無であったが、遺構の切り合い関係から近世の所産と考えられる。

5号土坑 (第5図、図版1)

C区東寄り中央部に位置し、不明遺構を切る。北半部は調査区外へ延長する。主軸は南北方向と思われる、平面プランは楕円形を呈する。検出長0.9m、幅1.0m、深さ最大0.5mを測り、東半部は攪乱によっ

て削平されている。表土掘削時に誤って上部を削平してしまったため、部分的な記録しか取れていない。埋土は暗褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑か。

出土遺物は認められないが、埋土の状況から近世の所産と考えられる。

【溝状遺構】

1号溝状遺構（第3・6図、図版2・3）

B・C区にまたがって検出している。やや東へ振って南北方向に流れる。7号溝状遺構、不明遺構を切る。幅0.55m、深さ0.8m前後を測り、断面は立ち上がり部分が明瞭な台形を呈する。埋土は黒～黒灰色シルトを主体とし、上部は水平堆積の様相を示す。なお、調査当初は近世代の溝と想定していたが、C区の埋土から現代の陶磁器が出土し、近年構築された溝と判明した。排水施設の一つと考えられる。

出土遺物（第7図、図版6）

4は須恵器の小型甕。口縁部は極ゆるやかなS字を描き、工具ナデに由来する突帯状の形状を示す。頸部には9条1組の櫛歯工具による波状紋が、肩部にはカキメが施される。体部はタタキ調整を行っているが、内面の当て具痕は部分的にナデ消されている。なお、これと同一と思われる破片が現代溝から出土している。5は陶器の急須蓋でつまみ部分が欠落している。本体とセットで使用した際に露出する箇所のみ釉薬を施しているが、これが焼成不良のためあられ状になっている。6は磁器染付の碗。高台部分に2重線がめぐり、見込みの中央部と外面に紋様を施す。7は陶器の火鉢。千鳥足で底部中央に穿孔が施される。外面上部のみを施釉しており、液垂れの痕跡が見られる。内面は無釉で煤が付着し、下部はあばた状に変形している。このほか、不明鉄製品や粘土塊、古墳時代の須恵器瓶類と思われる破片、中世の瓦器・青磁片、近世の赤絵・土鍋片などが出土している。遺物はいずれも混入品である。

2号溝状遺構（第3図、図版3）

B・C区にまたがって検出しており、ほぼ方位に沿って南北方向に流れる。いずれの方向でも調査区外へ延長する。1～4号土坑、7号溝状遺構に切られる。幅0.8～1.0m、深さ0.5m前後を測る。断面は丸みを帯びた台形で、埋土は黒褐色～暗褐色土を主体とする。底面には凹凸が認められ、水流を伴う溝であった可能性がある。C区の大半は現代溝に削平され、南側調査区外への延長および東西方向への屈曲は確認出来ない。規模・方向から近世に構築された区画のための施設と考えられる。

出土遺物（第7図）

8は焼き締め陶器の播鉢。内面に8条1組の播り目があるが、使用による磨滅で平滑になっている。体部はロクロ水引に由来する凹凸が目立ち、底部外面は工具ナデを施す。備前産か。9は近世の青磁碗。高台は釉薬を掻き落としており、その内面は無釉である。このほか、古墳時代の土師器甕・須恵器甕片が出土しているが、いずれも混入品と考えられる。

3号溝状遺構（第3図）

C区中央部東側に位置し、北西～南東方向に流れる。北端は調査区内で終息し、南端は調査区外へ延長するがのちに報告する不明遺構に切られて断絶するようで、壁面土層にこの溝状遺構の堆積は認められない。幅0.75m、深さ最大0.35mを測り、断面は台形を呈する。

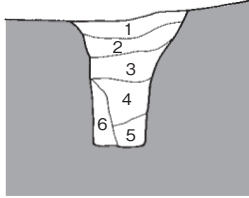
遺物の出土は認められず、構築時期は不明である。

4号溝状遺構（第3図）

C区南端に位置し、東西方向に流れる。東西いずれも調査区内で終息する、非常に短い溝状遺構である。全長2.0m、幅0.45m、深さ最大0.25mを測り、断面はU字型を呈する。

出土遺物は皆無であり、構築時期は不明である。

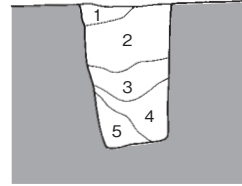
A 14.500m A'



【SD01 B区北半部北壁】

- 1 黒色シルト
- 2 灰色粘質土
- 3 黒色シルト (黄褐色・灰色粒少量含む)
- 4 黒灰色シルト
- 5 黒灰色シルト (褐色粒少量含む)
- 6 黒灰色シルト (黄褐色粒少量含む)

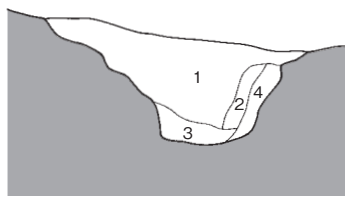
B 14.500m B'



【SD01 B区北半部南壁】

- 1 黒色シルト
 - 2 黒色シルト+褐色土+黄褐色粘質土
 - 3 暗褐色シルト (黄褐色粒少量含む)
 - 4 黒褐色シルト
 - 5 黒褐色シルト (黄褐色粒微量に含む)
- *全体にしまりが悪い

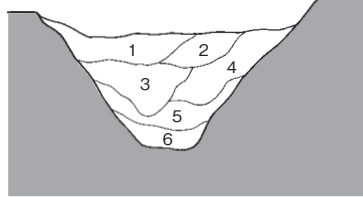
C 15.200m C'



【SD01】

- 1 灰色粘土混砂質土 (黄灰色粒少量含む)
- 2 灰色粘土混砂質土 (黄灰色粒中量含む)
- 3 灰色粘質土+黒色シルト+黄灰色ブロック
- 4 黒灰色土 (黄灰色粒微量に含む)

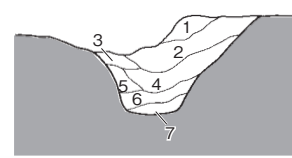
D 15.200m D'



【SD06 中央南壁】

- 1 暗褐色シルト
- 2 褐灰色砂質土
- 3 黒褐色シルト+暗褐色土
- 4 灰黄褐色～褐灰色砂質土
- 5 灰黄褐色砂質土
- 6 黒灰色粘質土+灰黄褐色砂質土+黄褐色粘質土

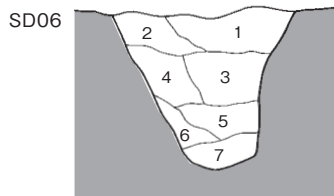
E 15.200m E'



【SD06 中央北壁】

- 1 黒色シルト (褐色粒少量含む)
- 2 黒色シルト
- 3 黒褐色シルト
- 4 黒褐色シルト (褐色粘土ブロック微量に含む)
- 5 褐色粘質土
- 6 黒色シルト
- 7 黄褐色砂混粘土

F 15.200m F'



【SD06 西壁】

- 1 褐色シルト混砂質土
- 2 灰黄褐色土+黄褐色粘質土
- 3 暗褐色シルト混砂質土
- 4 褐灰色シルト混砂質土
- 5 黒褐色シルト混砂質土
- 6 灰黄褐色砂質土
- 7 灰黄褐色砂質土+黒褐色砂質土



第6図 溝状遺構 土層断面図 (S=1/40)

5号溝状遺構（第3図）

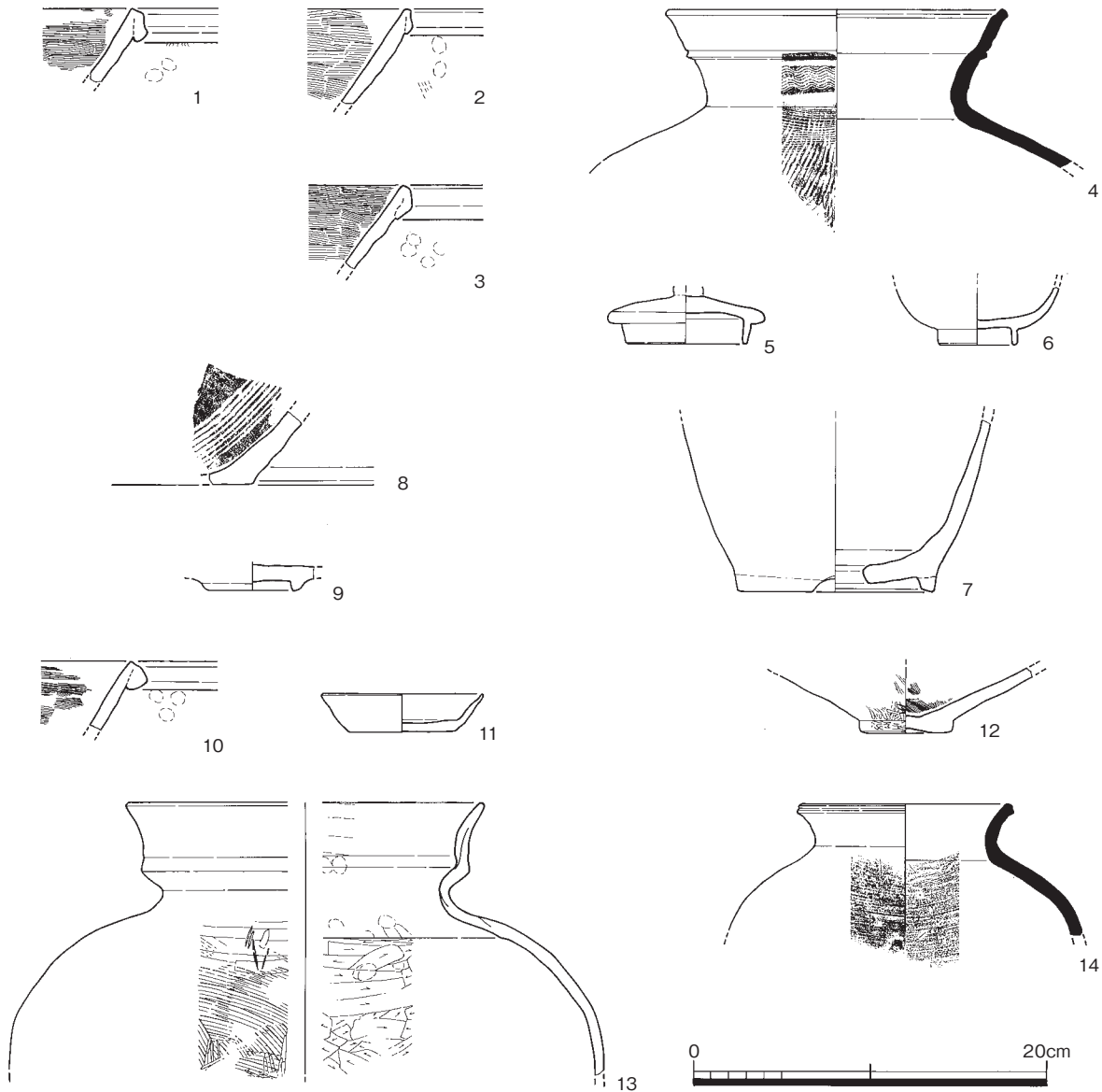
C区南西寄りに位置し、6号溝状遺構を切る。北端は調査区内で終息し、南北方向に流れて西に湾曲する。南端は現代溝に切られて断絶する。検出時に6号溝状遺構との境界を確認することが出来ず、西岸の記録が取れていない。幅0.8m、深さ0.3mを測り、断面はU字型を呈する。近世に構築された区画溝の一種か。

出土遺物（第7図、図版5）

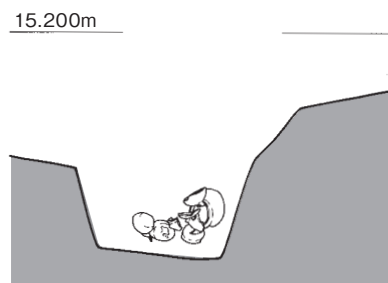
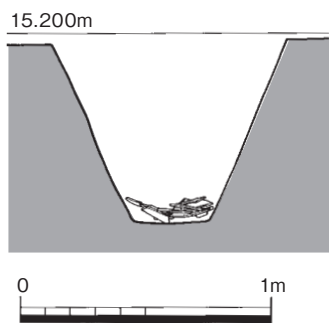
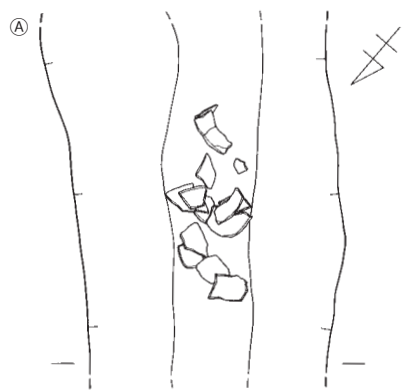
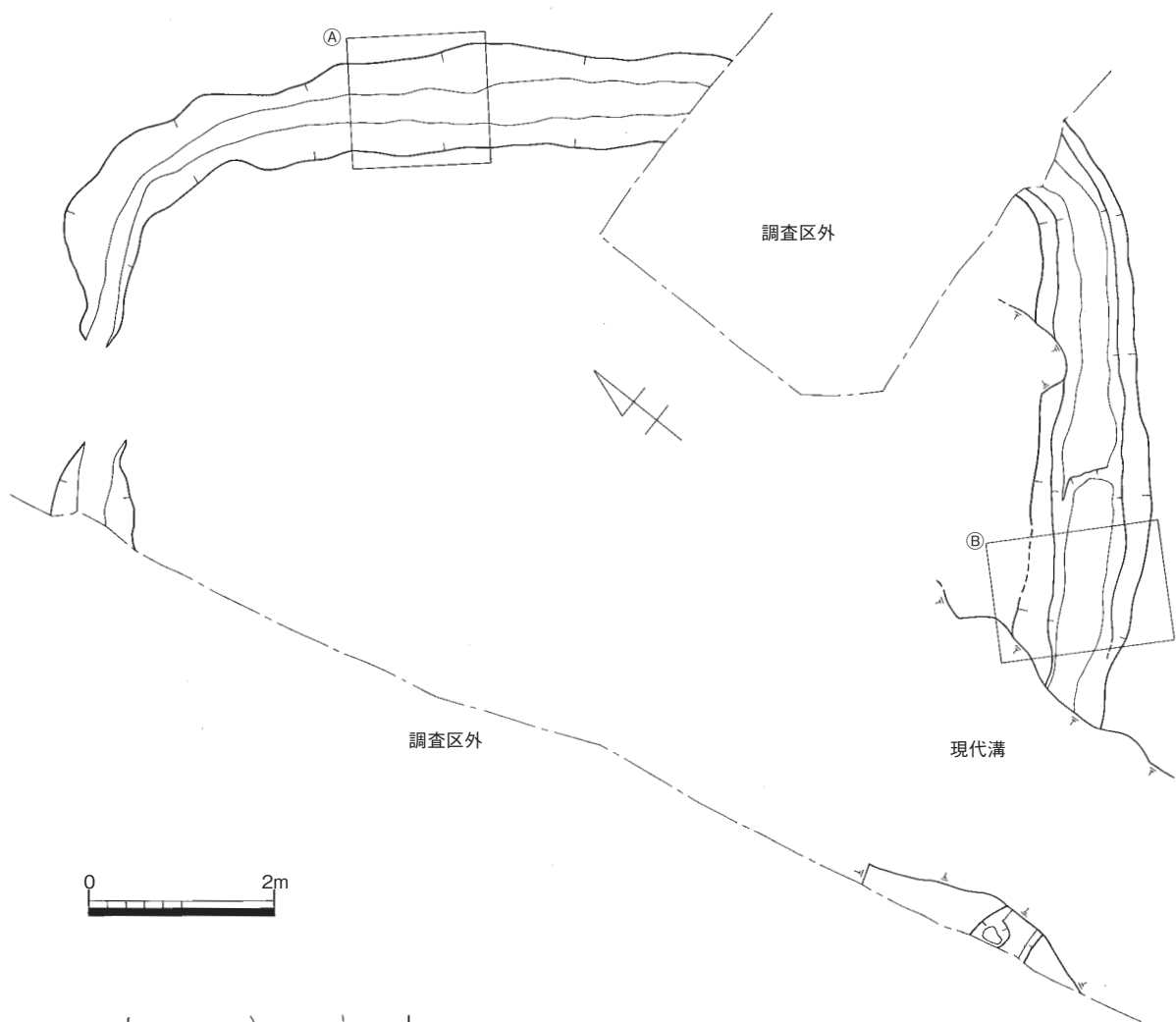
10は土師器土鍋の口縁部で端部に断面三角形の突帯をもつもの。内面はヨコハケ、外面はナデ調整を施す。口縁端部の内外面ともにわずかに煤の付着が見られる。

7号溝状遺構（第3図、図版3）

C区北端に位置する。1号溝状遺構に切られ、2・6号溝状遺構を切る。ほぼ方位に沿って東西方向に流れる。東端は攪乱土坑に切られているが、調査区外への延長を確認している。西端は調査区外への延長が認められないことから、現代溝に切られた箇所では終息もしくは南北方向へ屈曲すると思われる。幅1.2m、深さ最大0.35mを測り、断面はU字型を呈する。規模・方向から近世の所産である区画施設と考えられる。



第7図 土坑・溝状遺構・攪乱 出土遺物 (S=1/4)



第8図 6号溝状遺構 平・断面図 (S=1/80, 30)

出土遺物 (第7図)

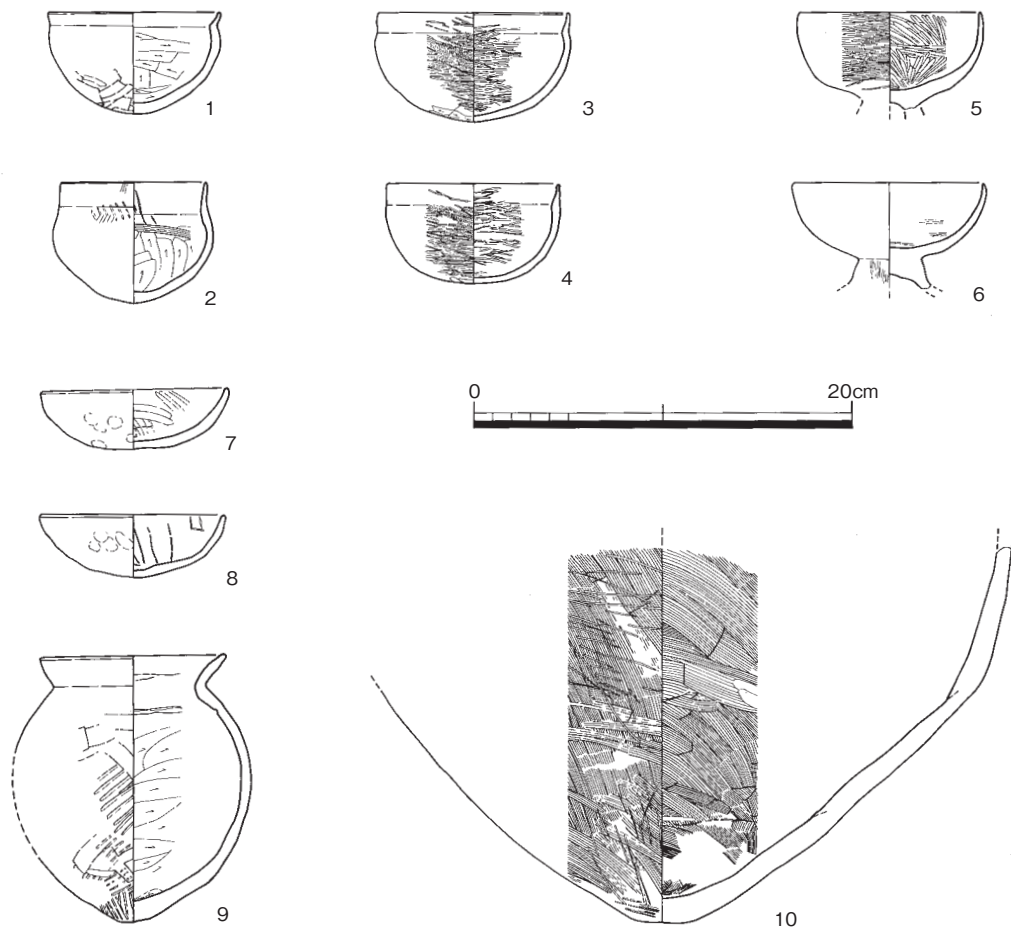
11は土師器の小皿。体部が比較的長く、斜め上方に直線的に立ち上がる。体部は回転ナデ調整で底部に回転糸切りの痕跡が見られる。このほか、古墳時代の土師器甑・須恵器甕の破片が出土しているが、いずれも混入品である。

【方形周溝状遺構】

6号溝状遺構 (第3・8図、図版4)

C区西半部に位置し、2・5・7号溝状遺構に切られる。西半部は調査区外へ延長し、北西—南東方向を意識して構築されている。調査対象地内の状況から、溝状遺構の内部は8m四方の規模であり、陸橋状の施設があるとなれば西隅の調査区外に設置されたと推定される。通常であれば主体部が存在する箇所が現代溝によって大きく破壊されており、埋葬施設については全く不明である。周溝状部分は幅1.1m、深さ最大0.8mを測り、断面は部分的に2段掘り込みを行った角度の強い台形を呈する。底面の標高は位置によって差があり、北・東側が高く西・南側が低い。これは意識的に底面を平坦にするのではなく、東から西への旧地形の傾斜をそのまま施設に反映していると考えられる。埋土は灰黄褐色～黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。また、図上A・Bの2箇所でもとまりをもって完形に近い土器群が出土した。遺物はいずれの箇所でも底面から5cmほど浮いた状況で確認している。出土状況から、Aの大型壺やBの高坏類は割ったのちに投棄したと思われる。

なお、記録はとれていないが、中央の調査区外部分から南へ延びる箇所の、検出面から10～15cm程度掘削した位置で、埋土内に多量の赤色顔料が含まれていたのを確認している。



第9図 6号溝状遺構 出土遺物 (S=1/4)

出土遺物（第9図、図版6）

1～9は第8図のB地点から、10はA地点から出土している。1～4は土師器の小型鉢。いずれも口径は10cm前後、器高は5.5cm前後であるが、2のみはやや縦に長く小型丸底壺に近い形状である。1はやや外湾した口縁部が短く立ち上がるもの。外面はタタキのち丁寧な工具ナデ、内面は不定方向の工具ナデで仕上げる。底部に部分的に黒斑が残る。2は胴部が口縁部よりも張り出すタイプのもの。内面は放射状の工具ナデ調整、外面はタタキのちタテハケを施し、工具ナデで平滑に仕上げる。やや焼成が甘く、表面は磨滅気味である。3・4は口縁部が直立的に立ち上がるもの。外面には細かい単位のヨコミガキを施し、頸部にわずかな段を残す以外は非常に平滑である。内面は工具ナデのちヨコミガキで調整している。3は体部外面に径1.5cmほどの黒斑が、4には内外面にモミの痕跡が残存している。5・6は土師器の高坏で、双方とも脚部を欠損している。埋土からはこれらと接合する資料は出土していない。5は外面を工具ナデのち細かなヨコミガキ、内面をやや幅広な放射状ミガキで仕上げ、外面に黒斑が見られる。脚部は棒状の工具で中空部分を作成、接合している。6は焼成がやや甘く、調整が不明瞭であるが、内外面ともミガキ仕上げと思われる。7・8は土師器の坏。7は外面に指ナデ、内面に放射状ミガキを施す。8は内外面とも工具ナデで調整し、指ナデで仕上げる。いずれもやや粗雑な作りである。9は小型の甕。外面は工具ナデを施しているが、この前段のタタキ痕跡が明瞭に残る。内面は工具によるケズリ調整を行っているが、粘土帯の接合痕が残存している。全体に非常に雑な作りである。内面には煤状の付着物が見られ、外面は被熱による破損と赤変、煤の付着が認められる。10は土師器の大型壺。埋土から同一個体と思われる破片が極少量出土しているが、いずれも細片であった。底部は板状工具で仕上げており、丸みを帯びており自立しない。外面はタテハケのち粘土帯接合部分に部分的にヨコハケを施し、まばらにミガキ調整を行っており、部分的に黒斑が残存している。内面は斜め方向のハケ調整のち、粘土帯接合部分のみをナデ消している。複数回の調整を行っているにも関わらず、粘土帯接合痕跡が目視で確認できる、粗雑な作りである。なお、内面には赤色顔料の付着が見られ、土器棺として使用された可能性も考えられる。

【不明遺構】（第3・10図、図版3）

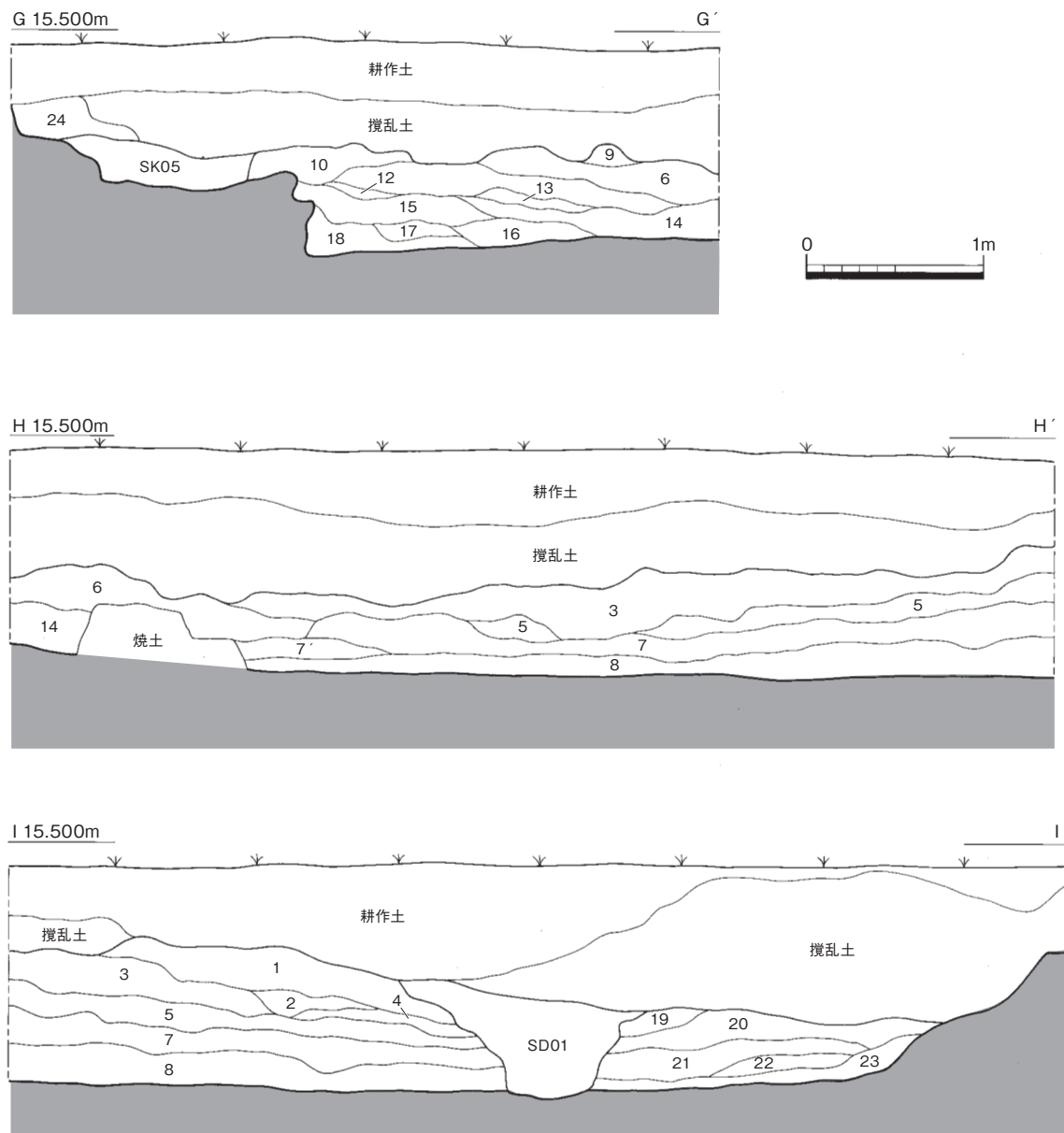
C区の南東隅では、広範囲で黒色シルトの堆積を確認している。現地調査の当初は複数の竪穴住居群が切り合っていると想定していた。しかし調査区壁面に沿って確認用のトレンチを掘削したところ、黄灰色土を主体とする埋土が全体に堆積している状況が見られたため、1つの遺構と判断した。埋土は均質で、ブロック状の土の混入もほとんど見られない。また遺物の出土も皆無に近い状況であった。北東―南西方向に6.5mに及ぶ基盤層との明瞭な境界があり、北側ではほぼ直立、南側ではゆるい傾斜の立ち上がりを確認していること、底面が同一レベルの平坦面であることから、小規模な谷状地形への土壌堆積ではなく、人為的な掘り込みと考える。C区の北側までは延長しない。調査区の隅で焼土のまとまりを確認しているが、底面から20cmほど浮いた位置にあり、関連する掘り込みや土手状構築物等は確認出来なかったため、別の場所で発生もしくは使用したものが投棄されたと考えられる。本来であれば全ての埋土を除去して状況を記録すべきであったが、遺構の規模と調査期間の都合上、完掘は行わずにトレンチの掘削・記録にとどめている。時期・用途は全く不明である。

トレンチからは、須恵器の小型甕の胴部破片と土師器皿片の2点が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

【その他の遺物】（第7図、図版5）

調査区西端で検出した現代溝は、規模と調査期間の都合上、遺構と明瞭に切り合う箇所のみを掘削した。この埋土からは、混入品であるが多数の遺物が出土している。12は弥生土器の壺の底部。底部外面中央はナデによるくぼみがあり、体部には単位の細かい縦横のミガキを施す。内面下部は不定方向のハケ、中部は板状工具ナデで平滑に仕上げており。13は土師器の二重口縁壺。頸部が非常に短く、甕に近い形状をとる。外面肩部はヨコハケのち工具ナデ、胴部はタテハケのち部分的にタ

テミガキを施す。頸部内面はナデで仕上げているが、粘土帯接合の際の指オサエが目立つ。体部内面は不定方向の工具ケズリ。全体に粗雑な作りである。14は須恵器の小型甕。頸部を絞り込んで仕上げるタイプのもので、外面はタタキ痕跡を工具使用の回転ナデ、内面は当て具痕をナデ消している。頸部内面と胴部下方に降灰による自然釉が見られる。そのほか、図示はしていないが、銅製煙管吸口、赤絵磁器、染付磁器、唐津焼小片、肥前産播鉢などが出土している。また、表採資料の中には近世後半の所産である染付磁器が多く含まれていた。



【C区壁面】

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 1 褐色土 (黄褐色粒少量含む) | 13 黒褐色土 (焼土粒少量含む) —東壁面の焼土と対応 |
| 2 灰黄褐色土 | 14 黒色シルト |
| 3 黄褐色土 | 15 黄灰色土 |
| 4 灰黄褐色土+黒褐色土 | 16 黄灰色土 (シルト混) —5層と対応 |
| 5 黄灰色土 | 17 灰黄褐色土+黄褐色粘土ブロック—8層と対応 |
| 6 黒褐色シルト | 18 褐色土+黒色シルト+黄褐色粘質土 |
| 7 暗灰色土 | 19 黒褐色土 (黄灰色～褐色ブロック少量含む) |
| 7' 暗灰色土 (やや明るい色調) | 20 黒色土 |
| 8 黄灰色土 (シルト混、しまりやや良い) | 21 黒色土 (黒灰色シルト中量含む) |
| 9 暗褐色土 | 22 黒色粘土混シルト |
| 10 明褐色土 | 23 黒灰色シルト (しまり良い) |
| 11 暗褐色土 | |
| 12 黒褐色土+灰黄色土 | *全体にしまりが悪い |

第10図 C区南東部壁面 土層断面図 (S=1/40)

IV. 調査成果のまとめ

寺福童遺跡では、これまでの発掘調査で弥生時代から近世の遺構・遺物が確認されている。弥生時代・古墳時代の遺構検出箇所は周知の包蔵地内全域に点在しているが、古代の遺構は遺跡の所在する台地の南東側に集中する傾向が見られる。今回の調査では、古墳時代前期及び近世の遺構を確認した。ここでは本遺跡で検出した遺構の状況と、これまでの調査成果からこの地区の歴史的様相を概観する。

【弥生時代の様相】

寺福童区において明瞭な生活痕跡が認められるのは、弥生時代前期からである。まず遺跡の展開する低位段丘中央部の寺福童遺跡5に木棺墓群が、そしてこれと連続して中期初頭から前葉の甕棺墓群が営まれる。この墓域は一旦中断したのち、中期中葉から後期にかけて土壙墓群に変移して再び隆盛し、古墳時代初頭から前期にかけての方形周溝墓群へと系譜を繋ぐ。また、詳細な出土地点は不明であるが、中山平次郎氏によって「弥生式土器聚成図録」で紹介された甕棺を伴う後期の墓域が、これとは別に存在した可能性も想定される。

このほかに特筆すべき中期の遺構として、寺福童遺跡4で検出された銅戈埋納遺構が挙げられる。この遺構は後世の土坑に削平されており、部分的な検出にとどまったが、9口の中広形銅戈が土坑に直接埋納されていたこと、複数回の再埋納が行われていたことが明らかとなっている。但し、この調査区内では同時期の遺構がほとんど認められていない。

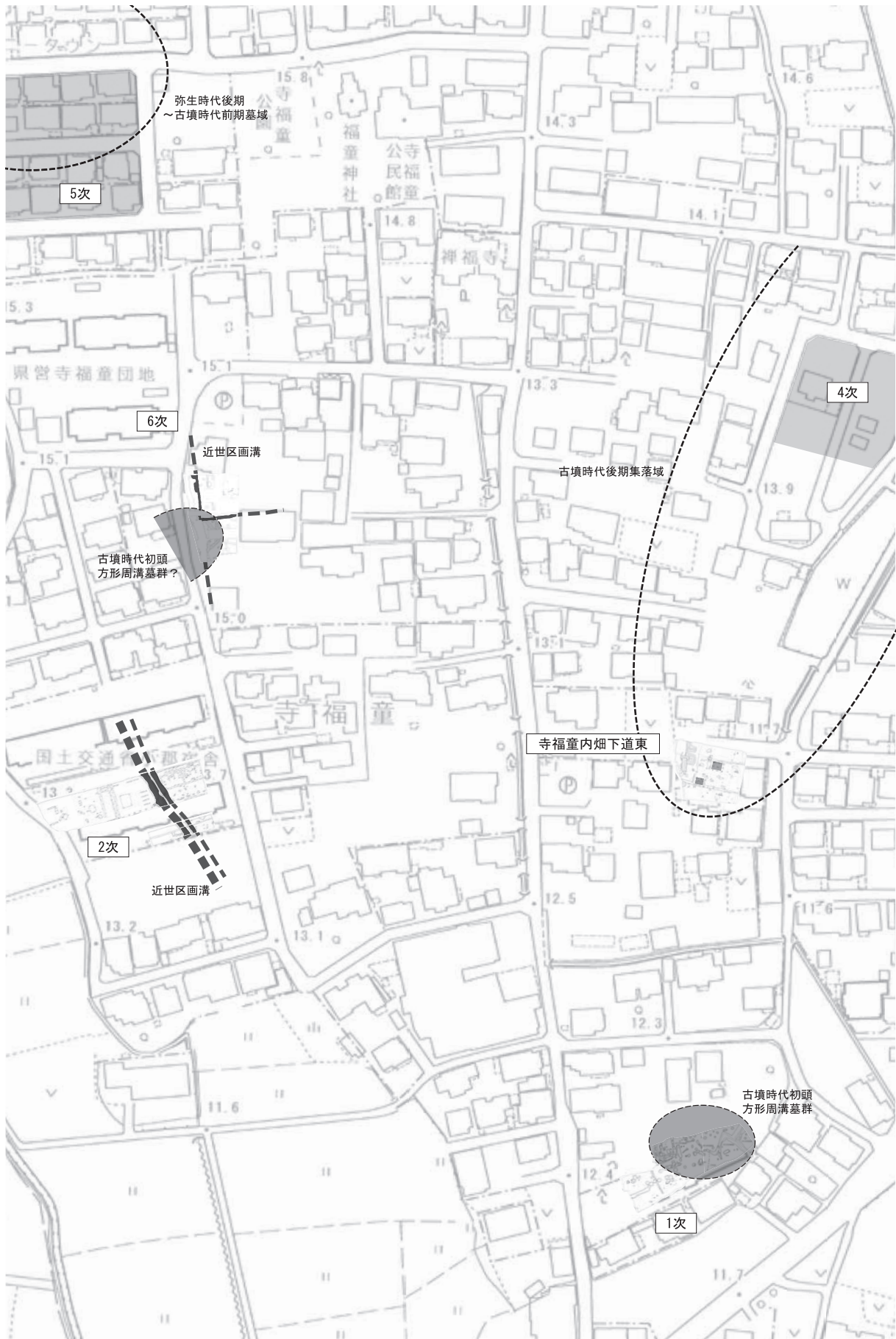
このように、これまでの調査で確認されている祭器を保有した、あるいは墓域を形成した集団の集落は現在のところ不明である。しかし、その存在を推測させる資料がある。平成22(2010)年、福岡県教育委員会から小郡市教育委員会に移管された埋蔵文化財の中に、昭和59(1984)年10月付で収集された「福童線」という名称を付された資料群が含まれている。関連する日誌・図面等がなく、本格的な整理作業は未着手のため詳細は不明であるが、資料群は貯蔵穴・甕棺墓・住居・土坑等に分別されており、甕棺・貯蔵穴出土土器は前期、住居出土土器は中期の資料が見られることから、今後資料を精査することで新たな知見が得られるだろう。また、今回調査区を含め、これまで発掘調査を実施した各地点からも、少量ではあるが弥生時代中期～後期の土器類が出土している。将来、低位段丘の中心部において、集落域が確認される可能性は高いと言えるだろう。

【古墳時代の様相】

寺福童遺跡5は、弥生時代後期から古墳時代前期へ連続する墓域と推測される。ここから南へ約500m下った寺福童遺跡1でも、古墳時代初頭の方形周溝墓群が確認されており、それぞれが異なる墓域として経営されていたと考えられる。今回の調査区は距離的には両者の中間に該当し、1基ではあるが方形周溝墓を確認している。出土した遺物は小型鉢が主体で、大型・小型の甕各1点を含むが、いずれも製作技法や仕上がりを勘案すると在地色が非常に強い。

寺福童遺跡5では、3号墓で庄内系の長頸壺、4・5号墓で庄内系の甕が出土しており、いずれも在地色が強い。方形周溝墓は全て同一方位を意識して構築されていることから、短期間に連続して造られたと考えられる。寺福童遺跡1では、1号墓で庄内系の甕、2号墓で二重口縁壺をはじめとする布留0式の一括資料、4号墓でも布留0式の甕が出土しており、こちらもこの時期の比較的短い期間に連続して構築されたと考えられる。今回の調査区で検出した方形周溝墓からの出土遺物は、これらの遺物よりやや古手の様相を示しており、既調査区との位置関係からも、同一の墓域の構成要素とは考えがたく、新たな墓域の存在が想定される。

また、これまで寺福童遺跡地内の古墳時代前期の墓域は、同時期の遺物が出土した集落遺跡である、大崎小園遺跡、福童町遺跡との関連が示唆されてきた。今回調査区で出土した土器は在地色が濃いことから、外来系土器の出土した大崎小園遺跡ではなく、在地系の遺物が見られる福童町遺跡の集落との関連性が高まったと言えるだろう。



第11図 周辺調査区と今回調査地点 (S=1/2,000)

遺物観察表

法量 = 口 : 口径、高 : 器高、底 : 底径
器種 = 土 : 土師器、須 : 須恵器、磁 : 磁器、陶 : 陶器

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量 cm・g (復元値)	色調	胎土	胎土	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号
第7図 1	5	B区 SK2	土・鍋	残存高:4.2	橙色	0.1~0.5mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:指オサエ、ヨコナデ 体・内:ヨコハケ	小片		1
第7図 2	5	B区 SK3	土・鍋	残存高:5.4	橙色	0.1~2.0mmの白色 砂粒中量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:指オサエ、ヨコナデ 体・内:ヨコハケ	小片		1
第7図 3	5	B区 SK3	土・鍋	残存高:4.7	橙色	0.1~1.0mmの白色 砂粒中量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:指オサエ、ヨコナデ 体・内:ヨコハケ	小片		2
第7図 4		C区 SD1	須・甕	口:(18.8) 残存高:8.9	灰色	0.1mmの白色砂粒 を少量含む	良好	口:タテハケ、回転ナデ 体・外:タタキ、カキメ 体・内:当て具痕、ナデ消し	口~肩	頸部に櫛状工 具の波状紋	1
第7図 5		B区 SD1	陶・火鉢?	底:(10.8) 残存高:9.7	素地:灰褐色 釉薬:灰白色	0.1~1.5mmの白色 砂粒中量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	ロクロ水引き	体~底	切り取りによ る千鳥足、底 面に穿孔	2
第7図 6	5	B区 SD1	磁・碗	高台径:(4.25) 残存高:3.25	灰白色	0.1mmの白色及び 褐色砂粒を少量含 む	良好	ロクロ水引き	体~底		1
第7図 7	5	C区 SD1	陶・急須蓋	口:6.6 残存高:2.7	素地:淡黄色 釉薬:黒褐色	0.1mmの灰白色砂 粒を少量含む	良好	ロクロ水引き	4/5		2
第7図 8		B区 SD2	陶・播鉢	残存高:4.1	外:赤褐色 内:暗青灰色	0.1~2.0mmの白色 砂粒を中量含む	良好	ロクロ水引き 底・外:工具ナデ	小片	内面に8条1組 の播り目	1
第7図 9		B区 SD2	磁・碗	高台径:(4.8) 残存高:1.5	素地:灰色 釉薬:灰オリーブ 色	0.1mmの白色砂粒 を少量含む	良好	ロクロ水引き	小片		2
第7図 10	5	C区 SD5	土・鍋	残存高:3.9	橙色	0.1~1.0mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:指オサエ、ヨコナデ 体・内:ヨコハケ	小片		1
第7図 11		C区 SD7	土・小皿	口:(9.0) 底:5.9 高:(2.2)	にぶい黄橙色	0.1~0.3mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:体:回転ナデ 底・外:回転糸切り	2/3		1
第7図 12		C区 西側 攪乱溝	弥生・壺	底:5.2 残存高:3.7	にぶい褐色	0.1~0.5mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	体・外:ミガキ 体・内:不定ハケ、工具ナデ 底・外:工具ナデ、指ナデ	小片		3
第7図 13	6	C区 西側 攪乱溝	土・壺	口:(20.0) 残存高:15.4	黄橙色	0.1~0.2mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:工具ナデ・ハケ、タ テミガキ 体・内:指オサエ、工具ケズリ	口~肩		2
第7図 14	6	C区 西側 攪乱溝	須・甕	口:(11.6) 残存高:7.4	器表:灰黄色 自然釉:灰オリ ーブ色	0.1~0.3mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:内外:回転ナデ 体・外:タタキ、工具使用回 転ナデ 体・内:当て具痕、回転ナデ	口~肩		4
第9図 1	6	C区 SD6	土・小型鉢	口:9.1 高:5.4	橙色	0.1mmの白色砂粒 及び雲母を微量に 含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:タタキ、工具ナデ 体・内:工具ナデ	完形		4
第9図 2	6	C区 SD6	土・小型鉢	口:7.6 高:6.4	黄橙色	0.1mmの白色砂粒 及び雲母を微量に 含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:タタキ、タテハケ、 工具ナデ 体・内:工具ナデ	完形		5
第9図 3	6	C区 SD6	土・小型鉢	口:10.0 高:5.8	明赤褐色	0.1mmの白色砂粒 及び雲母を微量に 含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:手持ちケズリ、ヨコ ミガキ 体・内:工具ナデ、ヨコミガキ	完形		3
第9図 4	6	C区 SD6	土・小型鉢	口:9.0 高:5.4	明赤褐色	0.1~0.8mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:手持ちケズリ、ヨコミガキ 体・内:工具ナデ、ヨコミガキ	完形		2
第9図 5	6	C区 SD6	土・高坏	口:9.4 残存高:5.15	橙色	0.1mmの白色砂粒 及び雲母を微量に 含む	良好	口:ヨコミガキ 体・外:工具ナデ、ヨコミガキ 体・内:ヨコナデ、放射状ミガキ	口~脚		10
第9図 6	6	C区 SD6	土・高坏	口:10.0 残存高:5.6	明赤褐色	0.1mmの白色砂粒 少量、雲母を微量 に含む	良好	体・外:タタキ? 体・内:ミガキ	口~脚		9
第9図 7	6	C区 SD6	土・坏	口:9.8 高:3.2	橙色	0.1mmの白色砂粒 及び雲母を微量に 含む	良好	体・外:指オサエ、指ナデ 体・内:工具ナデ、放射状 ミガキ	完形		8
第9図 8	6	C区 SD6	土・坏	口:9.7 高:3.3	橙色	0.1mmの白色砂粒 少量、雲母を微量 に含む	良好	体・外:指オサエ、工具ナデ、 指ナデ 体・内:放射状工具ナデ、ナデ消し	完形	黒斑	7
第9図 9	6	C区 SD6	土・小型甕	口:9.65 高:14.2	橙色	0.1~0.8mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	口:工具ナデ、ナデ消し 体・外:タタキ、工具ナデ 体・内:工具ケズリ	完形	内外面に煤、 外面は被熱に より赤変	1
第9図 10	6	C区 SD6	土・壺	残存高:20.0	黄橙色	0.1~0.8mmの白色 砂粒少量、0.1mmの 雲母を微量に含む	良好	体・外:タテハケ、部分的な ヨコハケ、部分的なミガキ 体・内:ナナメハケ	胴~底	内面に赤色顔 料痕跡	6



①寺福童遺跡6 A・B区全景（直上から、写真上方が北）



②寺福童遺跡6 C区全景（北から）

図版 b



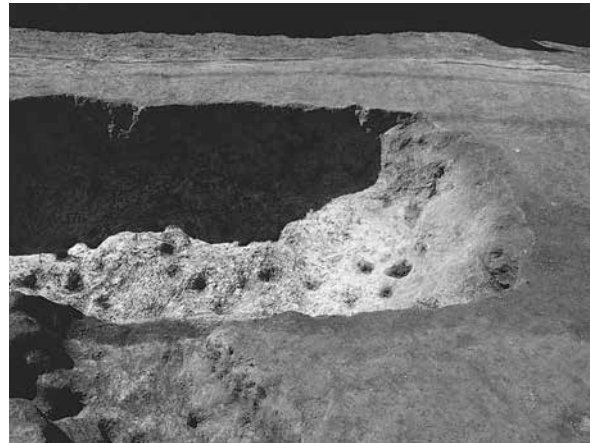
① 1号土坑 土層断面 (西から)



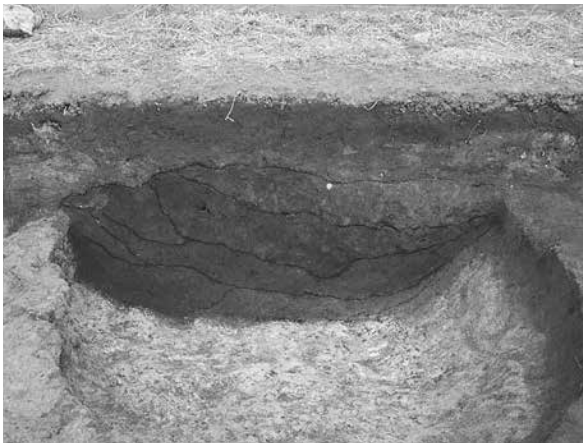
② 1号土坑 完掘状況 (東から)



③ 2号土坑 土層断面 (北から)



④ 2号土坑 完掘状況 (東から)



⑤ 3号土坑 土層断面 (南から)



⑥ 3号土坑 完掘状況 (西から)



⑦ 4号土坑 完掘状況 (南東から)



⑧ 1号溝状遺構 土層断面 (B区北壁) (南から)



① 1号溝状遺構 土層断面 (B区南壁) (北から)



③ 2号溝状遺構 完掘状況 (北から)



② 1号溝状遺構 B区完掘状況 (北から)



④ 7号溝状遺構 完掘状況 (西から)



⑤ C区北壁黒色土堆積 土層断面 (南西から)



⑥ C区東壁黒色土堆積 土層断面 (北西から)



⑦ C区南壁黒色土堆積 土層断面 (北東から)

図版 d



① 6号溝状遺構 完掘状況 (真上から)



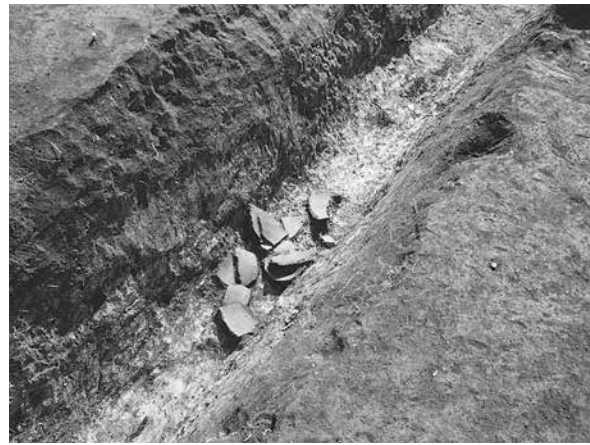
② 6号溝状遺構 土層断面 (南西から)



③ 6号溝状遺構 土層断面 (東から)



④ 6号溝状遺構 土層断面 (北西から)



⑤ 6号溝状遺構 遺物出土状況 (1) (西から)



⑥ 6号溝状遺構 遺物出土状況 (2) (南西から)

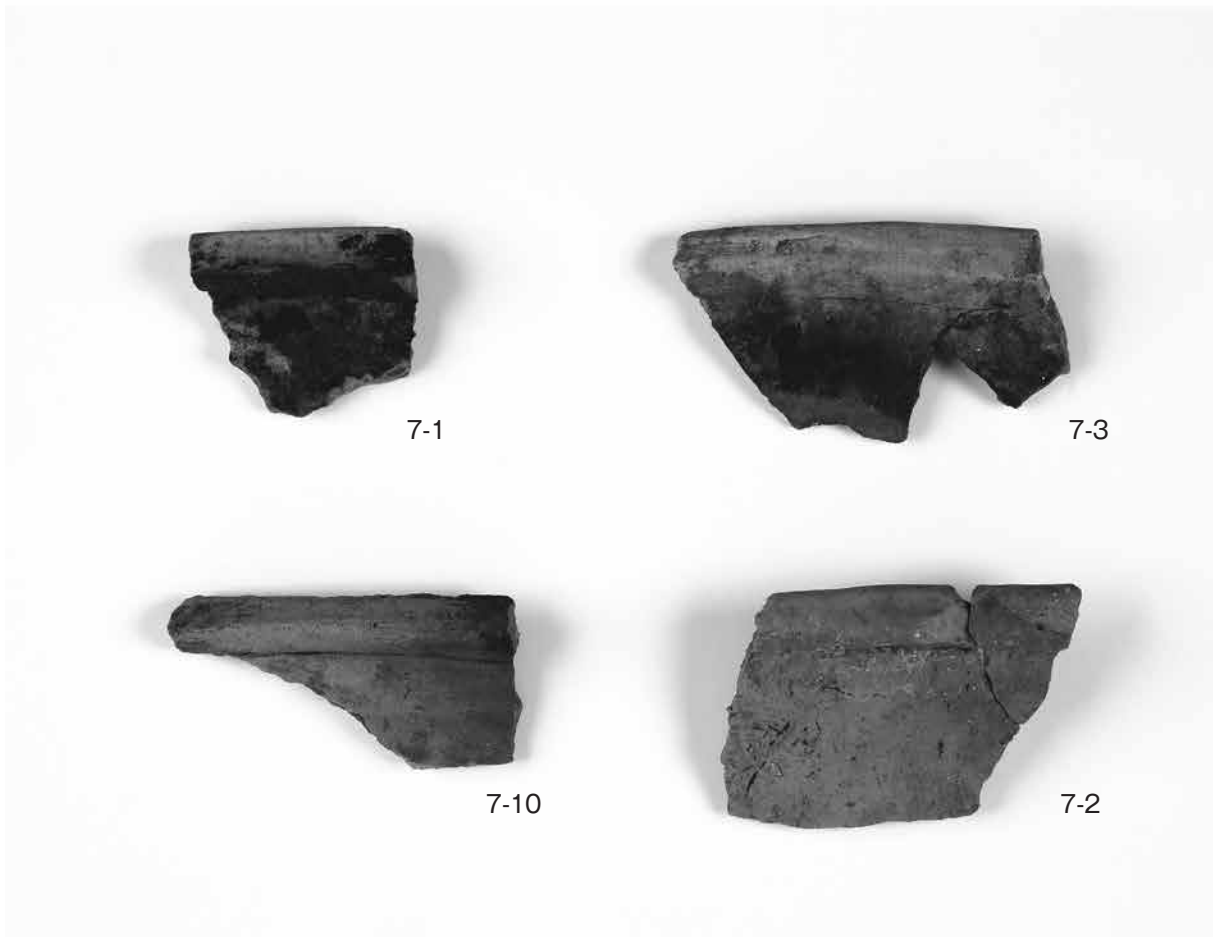
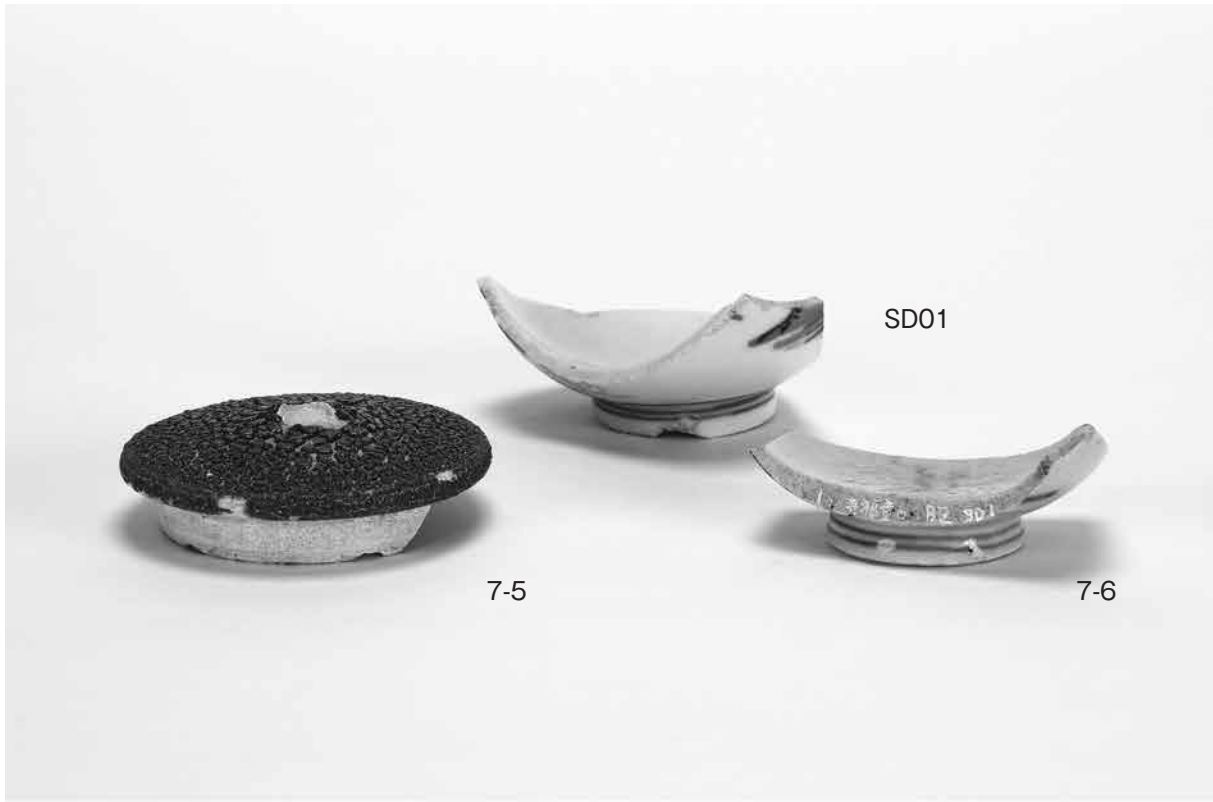


⑦ 6号溝状遺構 遺物出土状況 (3) (南東から)



出土遺物 (1)

图版 f



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	てらふくどういせき							
書名	寺福童遺跡6							
副書名	福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第294集							
編著者名	上田 恵							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在地	〒838 - 0198 福岡県小郡市小郡 255 - 1 Tel. 0942 - 72 - 2111							
発行年月日	2015 (平成 27) 年 3 月 31 日							
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838 - 0106 福岡県小郡市三沢 5147 - 3 Tel. 0942 - 75 - 7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
てらふくどういせき 寺福童遺跡6	おおりし 小郡市 てらふくどう 寺福童	40216		33° 38' 56"	130° 54' 82"	20140127 ~ 20140328	360 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
寺福童遺跡6	集落 墓地	古墳前期 近世	方形周溝状遺構 溝・土坑		土師器 土師器・陶磁器			
特記事項	古墳時代初期の方形周溝状遺構と、近世の所産である溝・土坑を検出した。隣接地では既調査で複数の方形周溝墓が確認されており、この箇所にも墓域が存在することが判明した。							

寺福童遺跡 6

—福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査報告—
小郡市文化財調査報告書第294集

編集 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 225 - 1

印刷 片山印刷有限公司
福岡県小郡市祇園1丁目8-15